



Reichenbachの未来表現の時間表示について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 熊谷, 隆司, 上山, 恭男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005591

Reichenbach の未来表現の時間表示について

熊谷 隆司・上山 恭男

北海道教育大学函館校英語学研究室

Reichenbach's Time Representation for Future Expressions

KUMAGAI Takashi and UEYAMA Yasuo

Department of English, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

Reichenbach に由来する時間表示は発話時 (point of speech, 以下 S と略記), 基準時 (point of reference, 以下 R と略記), 出来事時 (point of the event, 以下 E と略記) の3点によって表されるが, このうち基準時 (R) については一般に時を表す副詞表現によってその位置が決定されると考えられている. そして Reichenbach (1947a) では未来表現の時間表示について S,R-E と S-R,E の2つが提案されている. 3節で詳述するように, 通常未来のことを表現するためには5つの言語形式があるが, Reichenbach は5つの形式ではなく副詞の有無によって2つの時間表示を区別している. そのために, たとえば be going to という1つの言語形式に時を表す副詞が共起するか否かによって双方の時間表示が割り当てられるのである. しかし, 本稿は基準時 (R) の位置を決定づけるのは時を表す副詞ではなく, 個々の言語形式により固定的に1つの時間表示が割り当てられることを論じるものである. また, そのように捉えることにより未来のことを表現する個々の言語形式の本来的な意味が理解し易くなることを示唆する.

0. はじめに

時とは普遍的に流れているものである. それは右側に時間が進んでいると想定された時間軸上において現在という時点を中心にすれば, 左側は過去であり, 右側は未来とすることができる. 言語を用いて現在, 過去, 未来のことを発話する場合は, それぞれの時に応じて時制や相を使い分けることになるのだが, 英語においては時制や相を時間の表示として示すのに Reichenbach (1947a, pp.287-298) の時間表示が一般的に用いられる. Reichenbach の時間表示とは, 発話時 (S) と出来事時 (E), そして基準時 (R) の3点を用いて示すものである. そして, 未来表現¹において Reichenbach は2つの時間表示を示している.

(1) S,R-E

(2) S-R,E

ここでS, R, Eの3点を区切っている「,」は、区切られている双方が同時であることを意味し、「-」は双方が時間的に離れていることを意味する。このことについて時間軸を用いて表示すると次のようになる。



ところで、未来表現の形式については主に5つの形式がある。それは現在時制、現在進行相、be going to+不定詞、will/shall+不定詞、will/shall+進行相不定詞である。Reichenbachは5つの形式ではなく副詞の有無によって2つの時間表示を区別している。そのためにbe going to+不定詞については副詞が続くことによってどちらの時間表示も割り当てられることになる。しかし、本稿では5つの未来表現形式について、時を表す副詞ではなく個々の形式により固定的に1つの時間表示が割り当てられることを論じるものである。

また、そのように時間表示を割り当てることは未来表現の形式について、その本来的な意味を理解し易くすることをも示唆する。

1. 現在時制

Reichenbach (1947a) による現在時制の時間表示は次のように示されている。

(4) S,R,E

(4)ではS, R, Eの3点とも「,」で区切られているだけである。これは3点が重なっていることを意味するが、発話時(S)は現在時にあるため3点とも現在時において重なっていることを意味している。現在時制の用法は時や条件を表す副詞節の中や、すでに確定している未来表現、過去の出来事をあたかも目の前で起きているかのように伝える歴史的現在²などがあるが、基本的な用法は次の4つにまとめることができる。

(5) 現在における状態や性質

(6) 瞬間的な出来事

(7) 一般的な事実

(8) 現在における習慣

(9) My house stands on a hillside. (私の家は丘の中腹にあります)

(10) Johnson passes to Roberts, Roberts to Watkins, Watkins takes it forward, oh he slips past the centre half beautifully, he shoots. (ジョンソン、ロバーツにパスしました。ロバーツ、ワトキンズにパスしました。ワトキンズ、ボールを前に進めました。ああ、センター・ハーフをうまくすり抜け、シュートしました。)

(柏野：1999, p.11)

(11) Hydrogen and oxygen make water. (水素と酸素で水になる)

(12) He keeps his words. (彼は約束を守る人です) ((9)と(11)及び(12)は荒木：1997 pp.162-164)

(9)の例は(5)の用法, (10)の例は(6)の用法, (11)の例は(7)の用法, そして(12)の例は(8)の用法に相当しているが, いずれにせよ現在時を含めた時間帯において, 話し手が出来事を現在のこととして捉えて表していることに違いはないといえる. (4)のS,R,Eは現在時にある発話時(S)において, 話し手の焦点を表す基準時(R)があり, そこから同時に生じている出来事を捉えているといえることができる. そしてその出来事の生じている時点を表しているのが出来事時(E)なのである. このことより(4)の時間表示は現在時制について適切に表しているといえることができるのである. また, 基準時(R)については, 時を表す副詞に応じて置かれるのが普通である. なぜなら, 時を表す副詞とは話し手が発話をする際に念頭に置く時点だからである. それは, 話し手の焦点を意味し, 時間表示上では基準時(R)として表されるのである.

しかし, 上の例でもわかるように現在時制の用例については特に時を表す副詞が続いているわけではない. このことは話し手が発話の時点に現在時制を用いることから, そこには言外に現在時を含む時間帯が含まれていると考えることができる.

2. 現在を中心として左側の時間表示

2.1. 過去時制

過去時制の時間表示は以下のように示されている.

(13) R,E-S

(13)で発話時(S)は当然現在時にあるのだが, 「-」で示しているように基準時(R)と出来事時(E)は発話時(S)から時間的に離れている. そしてこれらの2つの点は「,」で区切られているように同時にあることをも表している. また, 基準時(R)が発話時(S)よりも左側に離れていることは, この基準時(R)が過去の時間帯にあることを意味し, それは話し手が過去時に焦点を置いていることになるのである. この過去時制についての主な用法は次の3つにまとめることができる.³

(14) 過去においての出来事

(15) 過去においての状態

(16) 過去においての習慣

(17) They got up early and went on a hike. (彼らは早く起きて, ハイキングに行った.)

(安井: 1982, p. 77)

(18) She resembled Atalanta. (彼女は, アタランタに似ていた.)

(19) During the summer I went swimming every day. (夏の間, 私は毎日泳ぎに行きました.)

(以上2例は安藤: 1983, pp. 89-91)

(17)の例は(14)の用法, (18)の例は(15)の用法, そして(19)の例は(16)の用法に相当しているが, いずれにせよ話し手が現在時との関係において切り離れた出来事として捉えて表していることには変わりはないといえる. 現在時との関係において切り離されていることを意味するということは, 当然話し手が現在まで及んではない出来事を過去として捉えていることを意味するのだが, これは話し手の焦点が現在時ではなく過去のある時点に置かれることを意味しているといえることができるのである. なぜなら, 話し手が発話する際に過去時制

を用いるということは、同時に過去時に焦点をあてることになるからである。つまり、このとき話し手は特定の過去時を念頭において発話しているということができるのである。このことについて同様のことは柏野(1999, p.23)でも過去時制を用いるときの特徴として述べられている。また、Leech(1971a, p.9)は過去時制の意味要素として‘the speaker has a definite time in mind’と述べている。このようにして過去のある時点へ焦点をあてることにより過去の出来事と現在時との関係の切り離しが生じるのであるが、この焦点の移動による切り離しは一般的に言われていることでもある。

(13)のR,E-Sにおいて、基準時(R)は話し手の焦点の位置を表している。話し手の焦点とは、時を表す副詞に応じるが過去時制では当然過去時を示すので基準時(R)は過去時に置かれることになる。また、たとえその発話された過去時制の文脈に過去時を示す副詞がなくても、前後の文脈よりまたは意図的に過去時制を用いることから、過去時を示す副詞はその言外に含まれていると考えることができる。

2.2. 現在完了

現在完了の時間表示は以下のように示されている。

(20) E-S,R

(20)で、基準時(R)と発話時(S)は共に現在時にあることになる。そして出来事時(E)については、過去時のことなので当然発話時(S)から離れて移動することになる。この現在完了の主な用法は次の4つにまとめることができる。

(21) 結果

(22) 完了

(23) 経験

(24) 継続

(25) The lake has frozen. (湖は、氷結した。)

(26) John has just sneezed. (ジョンは、今くしゃみをした。) (以上2例は安藤：1983, pp.141-142)

(27) I've only been to Switzerland once. (私は一度だけスイスに行ったことがあります)

(28) The house has been empty for ages. (その家は長い間、空き家です)

(以上2例は荒木：1997, pp.175-176)

(25)の例は(21)の用法、(26)の例は(22)の用法、(27)の例は(23)の用法、そして(28)の例は(24)の用法に相当しているが、いずれにしても出来事が過去時に生じたことであるにも関わらず、話し手が現在とのつながりを持ったまま発話しているということが出来る。したがって、(20)のE-S,Rが表すように出来事時(E)は明らかに過去時に置かれるのだが、基準時(R)は過去時制の場合と異なり現在時に置かれることになる。このことは出来事が過去時に生じたことに関わらず、話し手は現在時に焦点を置き、現在時とのつながりを持った出来事として捉えていることを表している。

2.3. 過去完了

過去完了とは文法形式で表す相である。形式的には現在完了の過去形と考えることができる。しかし、意

味的には現在完了の意味をそのまま過去時のこととして表すことだけでなく、ある過去時を基準の時点としてさらに以前の過去時を表すという、いわば過去の過去を表すために用いられることも多い。その意味では、過去完了を過去時制よりもさらに以前の時点を示す過去の形式ということもできるのだが、過去完了がどちらの意味を表しているかについては区別をするのが難しい場合が多いのである。この過去完了についての時間表示は以下のように示されている。

(29) E-R-S

上の(29)では3点とも「-」で区切られている。これは3点が全て時間的に離れていることを意味している。発話時(S)はこれまでと同様に現在時に置かれているのであるが、出来事時(E)も当然過去の時点に生じたことなので過去時に置かれることになる。しかし、基準時(R)はある特定の過去時に置くために移動することになるのだが、この場合の基準時(R)は出来事時(E)とは重ならず発話時(S)と出来事時(E)の間に移動するのである。だが、この基準時(R)は発話時(S)と出来事時(E)の間に置くために移動するのではない。基準時(R)は発話時(S)との関係においてある過去時に基準の時点として置かれた後に、出来事時(E)が今度は基準時(R)との関係においてさらに以前の過去時に置かれるのである。

(30) The game had already begun when I arrived at the stadium.

(ぼくが競技場に着いた時には、試合はすでに始まっていた)

(31) There had been several family arguments before they made the final decision. (彼らが最終的な結論を下す前に、数回の家族会議がありました) (以上2例は荒木：1997, pp.180-182)

(30)は現在完了をそのまま過去時に移動させた例であり、(31)は、いわゆる過去の過去を表した例である。しかし、いずれにせよ以上の2例は過去完了として(29)のE-R-Sで表すことができる。そして、基準時(R)については過去時制で表される時間表示上の基準時(R)と性質は同じである。それは、いずれの基準時(R)も話し手の発話の際に念頭に置かれる過去時によって、過去の時間帯に置かれた点であり、またそこから現在時との関係に切り離しが生じているからである。

3. 現在時を中心として右側の時間表示

3.1. 未来表現について

未来表現を表すにはいくつかの形式が存在する。主な形式は次の5つである。

(32) 現在時制

(33) 現在進行相

(34) be going to + 不定詞

(35) will/shall + 不定詞

(36) will/shall + 進行相不定詞

(32)の現在時制で表す未来表現とは、確定的に生じる未来の出来事を表すために用いる形式である。したがって変更は通常不可能である。

(37) The movie begins at seven. (映画は7時に始まります)

(38) The President arrives this afternoon. (大統領は今日の午後、到着します)

(以上2例は荒木：1997, p.167)

(37)と(38)についてはすでに決定されている変更不可能な予定である。これらについては未来のことを表すというよりは、現在時においてすでに決定されている事実としての意味が強いとも考えることができる。このことは現在時制が持つ意味にも通じることである。

(33)の現在進行相で表す未来表現は、(32)のようにすでに確定されている意味があるが、(32)よりは確定度が低く、変更も可能な未来表現である。

(39) We're having fish for dinner. (ディナーには魚が出ます。)

(40) I'm inviting several people to a party. (パーティーには数人の人達を誘います。)

現在時においての取り決めや変更の可能性があることは(34)の be going to + 不定詞の未来表現にも意味的に通じるところがあり、そこから(33)と(34)では互いに書き換えられる場合も多いのだが、(34)の形式では現在の意図が表される場合も多い。

(41) She's going to have another baby. (彼女はもう1人子供を産みます。)

(42) There's going to be a storm in a minute. (すぐにも嵐がきそうだ。)

上の2例は現在時において、すでにその原因となることが存在していることを意味に含んでいる。たとえば(41)では彼女は子供を産むことを意味しているが、そこには彼女がすでに妊娠をしていることをも意味として含んでいるということが出来る。また(42)については嵐がくることを空の状況から感じ取っていることを意味に含んでいるのである。

(35)の will/shall + 不定詞の未来表現については、特に現在時において進行されている計画や原因などの意味は含まない。現在では人称に関わらず will を用いる傾向にあるが、その基本的な意味は未来への予測であるということが出来る。そしてこの will または shall に対する「予測」という意味づけは多くの文法家が指摘していることでもある。

(43) You will feel better after this medicine. (この薬を飲んだら気分がよくなります。)

(44) Perhaps I'll change my mind after I've spoken to my wife. (妻に話したらおそらく私の気持ちは変わるだろう。)(以上6例は Leech：1971a, pp.53-57)

上の2例はいずれも現在時との関わりが薄く、話し手の予測の意味が含まれている例である。たとえば(43)では薬を飲むことによって気分が良くなるということは、話し手の期待や予測である。さらに(44)でも妻に話すことで気持ちが変わることについては話し手の予測であることがいえる。

(36)の will/shall + 進行相不定詞の未来表現には未来時においての動作の進行と自然の成り行きを表す2つの用法がある。

(45) When I get home, my wife will probably be watching TV. (家に着くころ、家内はおそらくテレビ

を見ているところだろう.)

(46) I'll be seeing Bob this evening. (今晚ボブと会うことになっている.)

(以上2例は安藤：1983, pp.103-104)

(45)は未来時における動作の進行を表し、(46)では自然の成り行きを表している。自然の成り行きとは、進行の意味を含まないでいずれはそうなるであろうという意味である。

3.2. 未来表現の時間表示について

Reichenbach の未来表現についての時間表示は以下のようであった。

(1) S,R-E

(2) S-R,E

以上の2つの時間表示について Reichenbach はそれぞれに次の例をあてている。

(47) Now I shall go.

(48) I shall go tomorrow.

(47)は(1)に、(48)は(2)に相当する例である。これらの違いは時を表す副詞から生じていることは明らかである。したがって、nowにより現在時に焦点を置くと考えられる(47)の例では基準時(R)が現在時にある(1)が適していると考えられ、tomorrowにより未来時に焦点を置くと考えられる(48)の例では基準時(R)が未来時にある(2)が適していると考えられるのである。このことは、未来表現については時を表す副詞により2通りの時間表示が、形式に関係なくそれに共起する時を表す副詞によりそれぞれが相当するということになる。これは過去時制や現在完了とは異なることである。なぜなら、過去時制や現在完了においても時を表す副詞により基準時(R)の位置が決められたが、その副詞については形式により共起する種類が決定されるからである。過去時制についてはその形式を用いるところから、明確な過去時を示す副詞が共起することが多く、またたとえそのような副詞がなくても言外にも含まれることがいえる。現在完了では明確な過去時を示す副詞と共起することはないが、その形式を用いることから言外に現在時を示す副詞が含まれているものと考えられることができる。つまり、話し手は発話の際に念頭にある時点を置くことになるが、それによって形式を使い分けられているとも考えることができるのである。そのため、現在完了には過去時制で用いられるような明確な過去時を示す副詞を続けることがないのは、話し手が発話の際にそのような時点を念頭に置かないためであり、もしも過去時を示す時点を念頭においた場合は現在完了ではなく過去時制を用いて発話することになると考えられる。

しかし、先に述べたように Reichenbach によると未来表現については形式には関係なく、時を表す副詞によって2つの時間表示が表されている。このことについて Allen (1966, pp.157-158) は、過去時制や現在完了のように未来については形式的な区別がないためと述べている。このことは、未来表現形式の時間表示は形式ではなく副詞のみにより示されることを意味する。次は太田 (1972) の例である。

(49) We are going to see him tomorrow.

この例の時間表示について太田は(2)の S-R, E と(1)の S, R-E の 2つの時間表示を順にあてている。Reichenbach とは違い、1つの例について2つの時間表示をあてているが、このことについて太田は「(2)の S-R, E を採用するが、(1)の S, R-E も同様にありえる。」と述べている。このことは、単に時を表す副詞だけではなく、未来表現の形式が本来意味として持っていることから1つの形式で2つの時間表示の使い分けの可能性があるとということが考えられる。

3.3. 未来表現の形式による分類

未来表現の形式については先にも述べたように主に5つの形式があった。それらは(32)の現在時制、(33)の現在進行相、(34)の be going to+不定詞、(35)の will/shall+不定詞、(36)の will/shall+進行相不定詞であるが、これらは3.1.の未来表現のところでも述べた用法と用例に関する意味上2つに分けることができる。その意味上とは未来の出来事についてその計画や原因となるものがすでに現在時に存在しているかいないかの違いである。言い換えるならば、話し手の焦点が現在時にあるのか未来時にあるのかの違いであるが、これにより分類した場合、(32)から(34)の形式と(35)と(36)の形式の2つに分けることができる。このことについては、先に述べた未来表現の形式とそれに相当する例の説明より明らかであるということが出来る。たとえば(32)の現在時制で表す未来表現については、すでに決定されている計画のため、いわゆる現在においての事実として捉えられることである。また、(33)の現在進行相や(34)の be going to+不定詞については、すでにそれらが表す出来事の計画や原因が現在時に存在し、話し手はそのことより何らかの判断をしていると考えられる。そして(35)や(36)のように will または shall を用いた形式には、現在時においての計画や原因は感じられず、いわばその時点において話し手が思いつき発話したことということが出来る。

そしてこのように2つに分類した形式は、さらに2つの時間表示に割り当てることができる。先に分類した形式は、その形式が本来持っている意味より分類したということが出来るが、その形式による分類から2つの時間表示への分類が可能なのである。そうすると(32)から(34)の形式については(1)の S, R-E、(35)と(36)の形式については(2)の S-R, E に相当するということが出来るが、このとき(1)と(2)の時間表示上においての基準時(R)については、話し手の焦点位置という意味から適切に未来表現のそれぞれの形式に相当しているということが出来るのである。

このように(1)と(2)の時間表示については時を表す副詞だけではなく、形式による意味より使い分けられるということが出来るが、その形式による意味の区別に関しては(32)から(34)の3つの形式について時を表す副詞が続くのが必然的ではなく、話し手の選択的などところもあるということが出来る。したがって、たとえこの3つの形式に時を表す副詞がない場合でも不自然になることは少ないのである。この時を表す副詞について選択的などところがあることは、Leech (1971a, p.58) も 'A further point of resemblance between the Present Progressive and the be going to future is optionality of time adverbials.' と述べている。また、安藤 (1983, p.127) も同様に未来時を示す副詞句の共起は義務的ではないと述べている。(32)の現在時制については、時を表す副詞がない場合に単に現在時制の主な4つの用法と同様に捉えられることからそのような副詞が続くこともあるが、現在時においての計画などにより生じる出来事を表すことには変わりはない。また、その出来事については通常変更が不可能であり確定的に生じることが考えられるため、現在の事実を表す現在時制により近い形式といえる。このことについて安井 (1982, p.71) も「心理的には、現在の一部と考えられている」と述べている。そして、これらの3つの形式について時を表す副詞がない場合は自然に、いわゆる近い未来を示すことの意味が含まれることになるのである。

それに対して(35)と(36)のように will または shall を用いる形式には時を表す副詞が続くことの多い形式である。たとえば It will rain. では意味的に不自然である。これでは雨が降るであろうことは理解できても、い

つその雨が降るのかは何も示されていない。will や shall の未来表現ではこのいつ生じるのかという時を表す副詞が必要とされることが多いのである。このことは、話し手が will や shall を用いる際に特定の未来時を念頭に置くためと考えられる。したがって、そのような副詞がない場合は不自然とされやすいことになるのである。Leech (1971a, p.53) は、‘Frequently a sentence with will/shall is incomplete without an adverbial of definite time.’ と述べているが、このことについては(32)から(34)の形式が持つ意味とは異なる点であるといえる。そしてこのことから、will または shall を用いて未来のことを表す場合に、話し手は念頭にある特定の未来時を置くことも多いということが考えられる。

以上より、時間表示としての(1)と(2)は未来表現の形式が持つ意味により区別されるということがいえる。また、Comrie (1981, p25) は(1)と(2)の時間表示について、(1)には I am going to see, (2)には I will see. の例をそれぞれあてている。2つの例には時を表す副詞は続いている。これは形式のみによって区別していると考えられる。

4. 過去と未来の時間表示における2つの区分

4.1. 過去時制と現在完了

過去時制と現在完了の意味についてはそれぞれ2.1.と2.2.で述べた通りである。過去時制の時間表示は(13)の R,E-S であり、現在完了の時間表示は(20)の E-S,R であるが、これらの時間表示上の基準時(R)についてはこれまで述べてきたように時を表す副詞だけではなく形式により位置が決められているといえることができる。それはそれぞれの形式が本来持っている意味より考えることができるが、そのために Reichenbach でも、I saw John. を(13)の R,E-S にあてているが、これは時を表す副詞ではなく、その形式が持つ時点、いわゆる言外に含まれる時点より表しているといえる。現在完了には明確な時を表す副詞が続くことはないが、当然言外に現在時を示す副詞が含まれていると考えられ、Reichenbach では I have seen John. を(20)の E-S,R にあてている。そしてこれらの言外に含まれる時を表す副詞とは話し手が発話の際に念頭に置く時点であると考えられる。

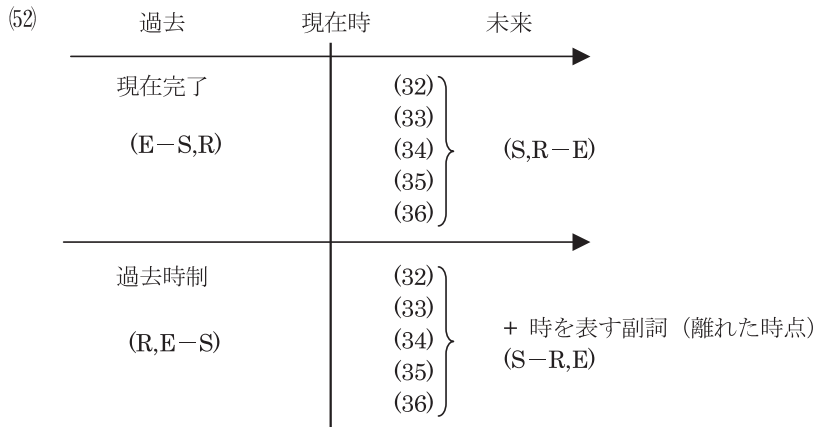
(50) Did you ever meet John?

(51) Have you ever met John?

(50)と(51)の2例はどちらもジョンに会ったことがあるかを質問している例であるが、(50)は過去時制、(51)は現在完了を用いている。これらの形式の使い分けは発話の際に特定の過去時を話し手が念頭に置くかどうかの違いである。したがって、話し手が過去時を念頭に置いた場合は(50)を用い、そうでなければ(51)を用いることになるのであるが、上の2例を時間表示にした場合、当然(50)は(13)の R,E-S, (51)は(20)の E-S,R で示されることになる。これは明らかに時を表す副詞ではなく、その形式自体が持つ特有の意味より時間表示の区別がされているといえることができる。

4.2. 未来表現の5つの形式

過去時制と現在完了については、前節で述べたようにそれらの形式から明確に時間表示を示すことができた。しかし、Allen が述べるように未来表現に過去時制や現在完了のような明確な形式的区別がないとするならば、未来表現形式の時間表示は形式だけではなく、それに続く時を表す副詞により過去時制または現在完了に類似した区分になると考えられる。



(52)は、現在時を中心として過去と未来の時間帯に分け、さらにそれぞれの時間帯について2つに区分した表である。過去の時間帯には現在完了と過去時制をあてているが、これらは形式上明確に区別されている時間表示のため2つの形式の間は時間軸によって分けられている。未来の時間帯については5つの形式を過去時制と現在完了と比較させるために分類しているが、それは時を表す副詞の共起のしかたや話し手の焦点が現在時にあるかどうかという、いわゆる基準時(R)の位置による。⁴しかし、未来表現の5つの形式については、時を表す副詞により現在完了にも過去時制にも類似した区分となりえる。したがって、(52)の表では(1)のS,R-E及び(2)のS-R,Eの時間表示は5つの未来表現形式に区別なく相当することになる。

しかし、このままでは未来表現形式が本来持っている意味を無視することになる。また、話し手が発話の際に持つ心境から選択する形式についても無視することになる。なぜなら、未来表現には5つの形式があるが、それぞれは特有の意味を持つ形式だからである。(50)と(51)の例については過去時制と現在完了のように明確に区別されている形式であるが、5つの未来表現形式についてもそれぞれが特有の意味を持つことから話し手が発話をする際に心境によりそれらを選択するということが考えられる。そしてそこには現在時より眺めた出来事なのか、未来時より眺めた出来事かの違いがあると考えられるのである。

(53) When I grow up, I'm joining the police force. (大人になったら、警察官になります。)

(Leech : 1971a, p. 58)

(53)は(33)の現在進行相を用いた未来表現であるが、近い未来ではなく遠い未来に焦点を置いていると思われる例である。このことは、時を表す副詞により区別なく(1)と(2)の時間表示を割り当てられることを意味し、(52)の表を裏付ける例ということもできる。しかし、(53)については確かに遠い未来を示す副詞が続いていたとしても、意味上は現在時においてあらかじめ決められていることである。したがって、たとえ時を表す副詞に焦点が置かれているようでも、そのことの原因となることは現在時に存在し、現在時より判断した事実的なこととして話し手の焦点が強く現在時にあると考えられる。同様のことは(34)のbe going to+不定詞の未来表現にもいえる。

(54) My son is going to be a doctor when he grows up. (息子は、大きくなったら医者になるつもりだ。)

(安藤 : 1983, p. 100)

(54)も(53)と同様に遠い未来を示し、話し手はその未来時に焦点を置いているように思われる。しかし、やはり(54)の例についても話し手の焦点は現在時にあるということが出来る。なぜなら、(54)については話し手が息子

の親であると考えられるが、この例を発話するためにはあらかじめ息子の意図または計画などを知っていなければならないからである。つまり、言い換えるならば息子の将来について、その計画または原因となることが現在時に存在していなければならないのである。このことは be going to + 不定詞が形式として本来持っている意味より生じることであり、未来時を示す副詞に関わらず話し手の焦点が現在時に強くあることを意味している。そしてこのような形式の持つ意味は will または shall を用いた形式の持つ意味とは完全に異なることであるといえる。

- (55) I'll be eighteen next spring. (来年の春には18歳になります.)
 (56) *I am going to be eighteen next year. (以上2例は安井：1982, p.73)

(55)は(35)の will + 不定詞、(56)は(34)の be going to + 不定詞を用いた例である。「*」(アスタリスク)はその例が非文であることを示している。(55)の will を用いた例が文として成り立つのに対して(56)の be going to を用いた例が非文なのは、この形式が表す意図(この場合は話し手本人の意図)が来年年をとることとは関係がないからである。この意図は現在の状態の一部であるが、この形式はここで will のように予測の意味を表すことはできないのである。

以上のことにより、通常の場合においての未来表現形式の比較は以下のように考えられる。



(57)において、特定の未来時に基準の時点を置かない(32)から(34)の3つの形式は現在完了に類似し、基準を置く(35)と(36)は過去時制に類似することを表している。⁵これらはそれぞれの形式が持つ本来の意味より分類しているが、ほぼ固定的であるといつてよいと思われる。なぜなら、基準時(R)は時を表す副詞によりその位置が決められるが、その副詞とは発話の際に用いる形式を決定させる一因であると考えられるからである。

4.3. 未来完了

未来完了とは文法形式で表す未来表現の1つである。will や shall を用いる未来表現は当然未来時制でもなくまた相というわけでもない。したがって、過去完了は相に相当するが未来完了は相ではなく、未来を表す単なる文法形式である。そしてこの未来完了が表すことは現在完了の意味を未来時のこととして捉えることである。未来完了の時間表示は以下のように示されている。

- (58) S-E-R

上の(58)では3点とも「-」で区切られている。これは発話時(S)のある現在時より出来事時(E)と基準時(R)が未来の時間帯へ離れていることを意味している。これらの2点が未来の時間帯へ離れることについては、

(2)の未来表現の時間表示に類似しているが、未来完了の場合は未来時の出来事よりもさらにある未来時に基準となる時点を置くために、(58)にみるように基準時(R)が出来事時(E)よりも右へ移動するのである。だが、基準時(R)は出来事時(E)との関係によって置かれるのではなく、発話時(S)との関係によって置かれるものである。そして出来事時(E)は基準時(R)との関係において置かれることになる。

(59) By the time this course is over, I shall have read "Hamlet" six times. (このコースが終わる時は、「ハムレット」を6回読んだことになる。) (安藤：1983, p.160)

(60) We will have known each other for four years next April. (来年の4月には、私たちは知り合いになって4年たつことになる。) (荒木：1997, p.186)

(59)において基準時(R)は By the time this course is over に相当する。話し手はこの時点において I shall have read "Hamlet" six times になるということを発話していることになる。(60)も同様に基準時(R)に相当するのは next April である。そしてその時点において We will have known each other for four years なることを話し手は発話している。したがって、出来事時(E)は基準時(R)との関係においてその位置が決められるということができるのであるが、こうして示される時間表示が(58)である。未来完了については、前節で述べた未来表現の5つの形式とは異なり、未来完了の形式から(58)の S-E-R が Reichenbach ではあてられている。これは過去完了と同様に形式上から生じることと考えられ、このことについては上で述べた用例の意味からも理解できることである。しかし、興味深いのはこの未来完了には will または shall のみが用いられることである。未来完了の時間表示は基準時(R)について(2)の S-R, E に相当するが、未来完了が示す特定の未来時を表すためには will または shall が適切であるということを表していると思われる。⁶

5. 結 論

以上のように Reichenbach (1947a) の時間表示を時制と相及び未来表現のそれぞれの形式と意味との関係を含めながら述べてきた。未来表現形式については、Allen (1966, pp.157-158) も述べているように過去時制や現在完了のような明確な区別がないために、(1)の S, R-E と(2)の S-R, E の時間表示が形式の区別なく割り当てられることがあった。このことは、過去時制や現在完了が表す出来事が現在時以前にすでに完結され、それは変えることのできない不変なことになっているのに対し、未来表現形式の表す出来事は変えられる可能性のあることだからである。

(47)の Now I shall go. と(48)の I shall go tomorrow. は時を表す副詞により(1)と(2)の時間表示に割り当てられ、(49)の We are going to see him tomorrow. は時を表す副詞があるために、(1)と(2)のどちらも割り当てられることになった。また、太田 (1972) では次の例もある。

(61) I will lend you the book tomorrow when I have finished reading it.

(61)を太田は主節と従属節に分けてそれぞれを時間表示に示しているが、will が用いられている主節では(2)の S-R, E で表している。このことは太田によると(34)の be going to + 不定詞と(35)の will/shall + 不定詞では同じ時間表示になりうるということである。しかし、これまで本稿で論じてきたように未来表現には主に5つの形式的区別がある以上、それぞれには特有の意味が含まれそして使い分けられるのである。時間表示上の基準時(R)とは時を表す副詞に応じるとされるが、そもそもそのような副詞とは過去時制の特徴にもあ

るように発話の際に話し手の念頭に置かれることである。そして(50)の Did you ever meet John? と(51)の Have you ever met John? の選択のように、念頭に置く時点とその時の心境により自然に話し手が選択することである。したがって、基準時(R)とは確かに時を表す副詞に応じる点ではあるが、実際は形式により決定される点であるということがいえるのである。すなわち、未来表現の5つの形式における時間表示とは、通常は(57)の表にあるように形式上から固定的に割り当てられるのである。そして、そのことによってそれぞれに割り当てられる時間表示から、その形式が持つ本来的な意味を理解するのが容易にもなるのである。

註

¹ 時制においては動詞の形態により現在時制と過去時制の2つが一般的に英語には認められている。will や shall を用いて未来時制とする考え方もあるのだが、一般的とは言えないため本論においても未来時制は認めずに、代わりに未来表現という語を用いることにする。

² 歴史的現在、過去の出来事を過去時制で表さずに現在時制で表すことである。これは一度現在とのつながりを切り離された出来事を再び結んで現在時制で表しているということができる。次は柏野(1999, p.15)の例である。

I was just about to go to bed when all of a sudden there's a knock at the door and Sam *rushes* in.

このような歴史的現在の時間表示はE-S,R,(E)とすることができる(熊谷:2006)。この(E)とは話し手が発話時において心の中で過去の出来事を現在において起きているものと想像しているところを想定した点である。そして、このためにSとRと想定による(E)の3点が現在時に同時に重なり、話し手は現在時制を用いて発話するようになるのである。また、歴史的現在とは小説などの文学の中だけではなく、広く日常会話においても用いられるものである。熊谷(2006)ではRをMとして表している。Mとはpoint of mindのことで、これは話し手の心の時点である。これについては基準時(R)が単なる基準とする時点だけではなく、その移動により現在時との心境的關係をも表していると解釈しているためである。詳しくは熊谷(2006)を参照。

³ 過去時制についての主な用法として3つにまとめたことについては柏野(1999, pp.21-33)による。

⁴ 基準時(R)については、厳密に言えば過去と未来の時間帯において置かれる位置によりその性質が異なることになる。このことは過去時制の時間表示である(13)のR,E-Sと未来表現の(2)のS-R,Eで生じる。(13)と(2)の時間表示は基準時(R)が現在時にある発話時(S)から離れるという点で類似しているが、表される意味は異なる。基準時(R)とは話し手の焦点を表す時点であるが、過去時制では現在時より離れるために話し手と出来事との関係に切り離しが生じることになる。しかし、(2)で表されるような未来表現では、たとえ基準時(R)が現在時より離れても切り離しということは生じることがない。これはすでに過ぎ去った過去の出来事と未来への予測から生じる出来事との違いのためであるが、このことから未来表現の(2)の時間表示については厳密に表した場合、S,R-R,Eとなりえる。なぜなら、話し手の焦点は未来時だけではなく、その予測を生じさせる現在時においても存在すると考えられるからである。つまり、(2)においては異なる基準時(R)が現在時と未来時にあることになり、さらに、(13)と(2)では基準時(R)は左側の過去の時間帯と右側の未来の時間帯においてそれぞれ異なった性質を持っているのである。

⁵ 現在完了に類似する形式として分類した3つの形式については、それぞれが特有の意味を持つためにその意味上同一の形式とすることはできないと思われる。しかし、基本的には(1)のS,R-Eの時間表示のように基準とする時点が現在時にあることから分類が可能である。また、3形式をさらに分類するような厳密な意味上の違いをReichenbachの時間表示で表すには限界がある。

(36)のwill/shall+進行相不定詞については、(35)のwill/shall+不定詞と同様にwillまたはshallを用いることから(35)の形式に類似するということができるが、(36)の形式が持つ当然の成り行きの用法については(35)と異なり、(32)から(34)の形式が持つ意味に近いと考えられる。しかし、この当然の成り行きについてはwillまたはshallが本来持っている意味ではなく進行相により派生的に生じている意味と考えることもできる。

⁶ will または shall が用いられることについては多くの文献でも言われていることではあるが、The Brown Corpus (60年代のアメリカ英語約100万語)、The LOB Corpus (60年代のイギリス英語約100万語)、Freiburg-Brown Corpus of American English (90年代のアメリカ英語約100万語)、Freiburg-LOB Corpus of British English (90年代のイギリス英語約100万語)の4つのコーパスを用いてwill または shall の代わりにbe going toに続く未来完了を検索してみた。その結果、4つのどのコーパスでもこの形式を見ることができなかった。このことから未来完了にはwill または shall のみが適切とされて用いられていることがわかる。

参考文献

- Allen, R. L. (1966) *The Verb System of Present-Day American English*, Mouton & CO.
- 荒木一雄 (1984) 『英文法用例辞典』 研究社出版
- . (1997) 『新英文法用例辞典』 研究社出版
- 荒木一雄, 安井 稔 (1992) 『現代英文法辞典』 三省堂
- 安藤貞雄 (1983) 『英語教師の文法研究』 大修館書店
- Bryan, W. F. (1936) 中條和夫 (訳) (1959) 『現代英語の過去と完了』 英語学ライブラリー (37), 研究社出版
- Bull, W. E. (1971) *Time, Tense, and The Verb*, University of California.
- Close, R. A. (1977) 齊藤俊雄 (訳) (1980) 『クローズ現代英語文法』 研究社出版
- Comrie, B. (1981) *On Reichenbach's Approach to Tense*, University of Southern California.
- . (1985) *Tense*, Cambridge University.
- Curme, G. O. (1931) *A Grammar of The English Language Vol. III. Syntax*, D. C. Heath and Company
- . (1947) 貴志謙二 (訳) (1954) 『カーム英文法』 篠崎書林
- 福村虎治郎 (1954) 『時制と態』 英文法シリーズ11, 研究社出版
- 樋口万里子 (2003) 「現在完了形と現在」『英語青年』 June 1. 研究社 pp.180-181.
- Jespersen, O. (1924) 半田一郎 (訳) (1958) 『文法の原理』 岩波書店
- . (1933a) *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin.
- . (1933b) 中島文雄 (訳) (1962) 『エッセンシャル英文法』 千城書房
- . (1949) *A Modern English Grammar IV*, George Allen & Unwin.
- Joos, M. (1968) *The English Verb*, The University of Wisconsin.
- 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社
- 熊谷隆司 (2006) 「歴史的現在の時間表示について - Reichenbach の時間表示を用いて -」『函館英文学 (45)』 函館英語英文学会
- Leech, G. N. (1971a) *Meaning and The English Verb*, Longman
- . (1971 b) 國廣哲彌 (訳) (1976) 『意味と英語動詞』 大修館書店
- 松村瑞子 (1996) 『日英語の時制と相 - 意味語用論的観点から -』 開文社出版
- 大塚高信 (1970) 『新英文法辞典』 三省堂
- 太田 朗 (1954) 『完了形・進行形』 英文法シリーズ12, 研究社出版
- . (1963) *Tense and Aspect of Present-Day American English*, 研究社出版
- . (1972) *Tence correlations in English and Japanese*, TESOL
- 太田 朗, 池谷 彰, 村田勇三郎 (1972) 『文法論 I』 英語学大系 3, 大修館書店
- Palmer, F. R. (1965) 安藤貞雄 (訳) (1972) 『英語動詞の言語学的研究』 大修館書店
- Poutsma, H. (1926) *A Grammar of Late Modern English Part II Section II The Verb and The Particles*, Noordhoff. Rpt.
- Reichenbach, H. (1947a) *Elements of Symbolic Logic*, The Macmillan Company.
- . (1947b) 石本 新 (訳) (1982) 『記号論理学の原理』 大修館書店
- Wolfson, N. (1982) *The Conversational Historical Present in American English Narrative*, Foris.
- 安井 稔 (1982) 『英文法総覧』 開拓社
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』 くろしお出版

(熊谷隆司 函館校大学院生)

(上山恭男 函館校教授)